

AI開発の費用は、 どこで決まるか。

見積もりに幅が出る理由と、届いた見積書の読み方

この資料で分かること

- 相場が数十万円～数千万円と幅を持つ理由
- 見積書に並ぶ5つの費目と、削れる／削れないの線引き
- 同じ要望でも金額が3倍変わる分かれ目
- 相見積もりを同じ土俵で比べるための前提の揃え方
- 予算が足りないときに、範囲を削る順序

オブティソース株式会社 / 2026年版

「AI開発はいくらかかりますか」という質問に、**一律の答えはありません**。同じ「見積書の作成を自動化したい」でも、対象を1部署に絞るのか全社に広げるのか、要件を自社で決められるのかどうかで、金額は簡単に3倍変わります。ただし**見積もりの構造そのものは決まっています**。構造を知っていれば、届いた金額が自社にとって妥当かどうかは判断できます。

費用が決まるのは「作る量」ではなく「決める量」

開発費の内訳を見ると、コードを書く作業が占める割合は思ったより小さく、何を作るかを決める工程と、決まらないまま進んで作り直す工程が金額を押し上げています。AIコーディングツールの普及で実装の単価は下がりましたが、「何を作るか」を決めるのは今も人の仕事です。ここが曖昧なほど費用は膨らみます。

相場の幅は、そのまま前提の幅

検索で出てくる「数十万円～数千万円」という幅は、対象範囲の違いをそのまま映したものです。金額を比べる前に、自社の前提（対象業務・使う人の数・扱うデータ）を1枚に書き出しておくと、届いた見積もりが高いのか安いのかを自分で判断できるようになります。

01

作る範囲

対象業務・使う人・扱うデータの3つで決まります。全社共通ではなく1部署1業務に絞ると、桁が変わることも珍しくありません。

02

誰が決めるか

要件を社内で言葉にできるなら、その工程を外注せずに済みます。丸ごと任せるほど費用は上がります。

03

作ったあと

運用保守と改善を含むかどうか。初期費用だけを比べると、あとから月額で差がつきます。

見積書に並ぶ5つの費目と、その意味

費目	何にかかるお金か	削れるか
要件整理・設計	何を作るかを決め、画面と処理の流れに落とす。ここを省くと後工程で必ず戻る	自社で担えば圧縮できる
実装	実際に動くものを作る。AIツールの活用で以前より単価は下がっている	範囲を絞れば下がる
テスト・調整	実際の業務データで動かし、現場の指摘を反映する	削ってはいけない
運用・保守	動き続けるための監視、不具合対応、小さな改善	月額として別に見る
外部サービス利用料	AIモデルの利用料やクラウド費用。使った分だけかかる	使用量に応じて変わる

届いた見積もりを読むときの8つの確認点

- ✓ 前提の範囲が書いてあるか

対象業務・利用人数・データ量。書いていない見積もりは比較できません。
- ✓ 要件整理が費目にあるか

入っていない場合、後から追加費用として出てくることが多いです。
- ✓ テストの範囲

開発側の動作確認までか、実業務のデータでの検証まで含むか。
- ✓ 納品後の対応期間

何ヶ月まで無償で直すか。1ヶ月と6ヶ月では意味が違います。
- ✓ 運用費用の内訳

監視・保守・改善が分かれているか。まとめて月額〇円は中身が見えません。
- ✓ AI利用料の負担

自社契約か、開発会社の契約に相乗りか。後者は解約時に困ります。
- ✓ 追加開発の単価

人日単価か機能単位の目安。決めていないと毎回交渉が発生します。
- ✓ 成果物の権利

ソースコードを自社で持てるか。持てないと他社に引き継げません。

範囲を1つに絞る

最初の1つで効果を確認してから広げます。全部やろうとすると、決めるだけで数ヶ月かかります。

要件は自社の言葉にする

業務を一番知っているのは現場です。整理を手伝ってもらい形にすると費用が下がります。

動くものを早く見る

資料での合意より、触ってみた指摘のほうが正確です。作り直しの回数が減ります。

運用まで含めて比べる

初期費用が安くても、月額と追加開発の単価で逆転することがあります。

費用の話は、金額そのものより「**何がどこまで含まれているか**」で決まります。範囲を1つに絞り、要件を自社の言葉にできれば、同じ成果をより小さい予算で得られます。当社では動く試作品づくりを**初期10万円～・月額10万円～**でお引き受けしています。

相談は無料です

現状を伺ったうえで、やらない方がよい場合はその理由をお伝えします。／ optisource.co.jp